

D. H. Lawrence の *Mr Noon* について

中村志郎

§ はじめに

数年前から刊行が続いている The Cambridge Edition of the Letters and Works of D. H. Lawrence の一冊として、昨年 1984 年の秋 *Mr Noon* (ed. by Lindeth Vasey) が出された。2 部構成で未完であるこの小説はロレンスの生前には発表されることなく、長年アメリカの出版社にその原稿は所蔵保管されていた。その間、全体量の 1/3 弱たる第 1 部だけは作者の死の 4 年後 1934 年に *A Modern Lover* (Viking) の一篇として発表され、更に 1968 年 *Phoenix II* (Heinemann) でそれはリプリントされた。1972 年に本作の全原稿類が競売に出されてテキサス大学の手に落ち、それが機縁になって今回ケンブリッジ版で 1 部 2 部合わせた形の完全出版となったが、第 2 部については、結局作者ロレンスの死後 54 年にしてはじめて、日の目を見たということになる。

本作の執筆は 1920 年から 21 年にかけてなされた。ケンブリッジ版の Introduction はその時期について詳しい調査結果と推定を与えているが、それによると 20 年 5 月 7 日には書き出されており、21 年 1 月 1 日には 20 章初めの部分に来ていて、作品は 23 章で未完中断なので、残りの、テキストにして 50 頁ばかりは、1 月のサルデニアへの夫妻の旅行のあと、2 月頃に書かれたのかもしれないという推定がなされる。本作と並行して執筆していた *Aaron's Rod* は 21 年 5 月 31 日に完成しているが、本作の方はその後中断のまま進行せず、記録の上で最後の本作への言及は 22 年 10 月 6 日で、差し当り完成の意欲のないことをそれは示している。この小説が未完で終り、作者生前に発表されることがなかったについては、あとで改めて考えてみたい。

構成を見ると第 1 部は 1 章から 12 章まで 91 頁から成り、第 2 部は 13 章から 23 章まで 196 頁から成る。各章には概ねタイトルが与えられているが、19 章及び最後の 23 章は無題で、当然、あとから付けようと思ったものが、そのままになったのであろう。1 部 2 部一貫して登場する人物は Gilbert Noon なる青年だけであるが、実はこの主人公も 1 部と 2 部でモデルが違う。1 部のギルバートは作者の少年時代の友人 George Henry Neville であり、2 部のギルバートは作者自身である。物語の連続性は一応保たれているし、モデルのすり替りによって予想される決定的な破綻も見られないが、作者としては随分大胆な試

みをしたことになる。この二人のモデルを一つに結びつけるものは、それぞれの現実生活でのほとんど時を同じくした女性関係、結婚である。つまり 1912 年 3 月にロレンスが耳にしたこの友人の女出入り及びその後の結婚と、同じ頃のロレンス自身の Frieda との出会い及びその後の駆け落ちが、2 人の青年を一人の主人公にまとめ込んだということになる (Introduction xl)。

第 1 部は、ドタバタ喜劇的な箇所を含んでいてユーモラスに展開され、20 世紀はじめの英国の田舎町の風俗を描いており、軽い印象はあるが、これを完結した一箇の中篇小説と見なすことも出来る。それに対して第 2 部は舞台も大陸へと変るが、展開が一転してシーリアスになる。1912 年、夫と 3 人の子をもつフリーダとの出会いのあと、困難にぶつかりながら手をたずさえて駆け落ちし、ドイツ、オーストリアからイタリアへと向かった作者自身の経験が、多少の設定上の変改はあるものの、ほぼ克明になぞられていて、小説としては作者の最も自伝的なものになっているが、こちらの方もまた独立した一篇と見れないこともない。中断は中断であるが、最後の辺りで作者の意図する主題がかなり集約的に現われており、あとしばらくで完結出来たのではないかと思われる。もっとも作者は 1921 年に入ってから、全体を 3 部構成に拡張して、自身の「自伝」としても、1912 年の事件で始まったこの作品を 1919 年まで延長したい意図をもったことがあるようである (Introduction xxx)。

このように 1 部は比較的単純で、軽い、動きの多い一篇の風俗小説の観があるので、以下、筋を追いながら独立した一項で扱い、2 部については、主題や問題点に関していくつかの項目に分けて取り扱うことにする。更に「むすびに」の項で作品の位置付けや評価を含めた全体にわたる問題を、総括的に考えてみたいと思う。

§ 1 第 1 部——‘*Minnesinger of the spoon*’*

冒頭数頁にわたり、中年の社会主義者で菜食主義者である Goddard 夫妻のある日曜午後、暖炉の石炭が赤く燃える居間風景が描かれる。倦怠と苛立ち、そして互に相手の神経を逆なでするような意地の悪い皮肉のやりとり、まるでこの二人の理想家が作品全体の中心人物であるかのように、作者は丹念にそれらを描く。作者はすでに長篇になることを意識して、ゆったりと、主人公でもないこの中年夫婦に長いショットを与えているのだろう。そこへギルバート・ヌーンが来訪し、二人はほっとしたように歓迎する。彼は数学教師で音楽にも造詣が深く、数学の論文書きと作曲につとめていて、数学や芸術の様に抽象でも完全でもない人生は、自分には重要性はないとうそぶく。Goddard 夫人 Patty が彼の女性への態度、女を遊びの対象でしか見ない残酷な考え方を非難しても、動じる様子がない。

* *Mr Noon*, p. 27.

パティが女性蔑視だと腹を立てているのはギルバートが毎日曜の晩 'spoon' に出かけることである。半ば公然化している土地の若い男女間の一つの習俗 spoon は、今風には necking, petting といったところなのであろう。ゴダード夫妻の家を辞去したギルバートはチャペルから出て来る会衆の中にガール・フレンドの Emmie を見つけ、彼女の案内で暗い秘密の所へ行く。暗がりの中に先客の気配がある。二人はすでに数年のつき合いで、ギルバートは spoon の名人、エミーの方も、小学校教師だが中々の遊び好きであるらしい。ここでロレンスの spoon 談議が始まる。現代には無邪気な娘を誘惑する者はいなくなり、唯あるものは現代的愛の極致たる spoon だけだと、逆説的に皮肉にこの現代の習俗を礼讃し、ギルバートの第一級の spoon により喜悅の底知れぬ深みに入ったエミーは、やがて完全に融解し、彼と一体化して、無窮無際限の世界に昇ったとする。作者はおどけと駄じゃれ混じりに、このようになりたかったら、若者たちよ、練習だと、読者に話しかける。

性と愛を最も純粋な形で追求した筈のロレンスの、皮肉混じりとは言え意外な spoon 論が続く。若い世代の（この二人はそれ程若くはないが）結婚前に通過する一つの過程としては、これに作者は好意的な態度を示すのであろう。しかしそれ程若くはないこの二人は、spoon の喜びだけでは満足出来ない。エミーの口やかましい父親が夜勤に出たあとと再会することを、二人はしめし合わず。しかし疑ぐり深い父親が引き返して来て、温室で密会している二人を見つけ、親の顔に泥を塗る気かと烈火の如くに憤り、一方ギルバートは恋路を邪魔されてどす黒い怒りが燃え上がり、二人の男は組んずほぐれつ猛烈に取っ組み合う。ギルバートはこの父親を殺してやりたいとさえ思う。この辺りの性愛をめぐる激しい情動はいかにもロレンスの主人公のものらしい。

この事件の一週間あとギルバートがパティと散歩しているとき、これまで女性との真の触れ会いをもったことのない彼は、パティが新しい Aphrodite として自分の心を捉えてくるのを感じる。エミーのような小娘ではなく、またパティ自身がそうである自立した理論家女性としてでもなく、40歳の、すべての性愛の喜びを経験してきた、今は夫とつながりのなくなった、柔らかな成熟し切った Aphrodite としてであった。一方これまで若いギルバートに関心を持ち、誘うような素振りのあったパティは、しかし今、深い欲望をもって自分を求めている男の眼を見てたじろいでしまう。二人は散歩からの帰途、牧草地で雌牛に襲われ、心臓の弱いパティは息も絶え絶えに坐り込む。惨めな姿をさらして周囲の好奇の目を引いた屈辱感に彼女はさいなまれ、唯、夫のところへ戻ることを願う。一方ギルバートもすべてが終わったように感じて、落ち込んでしまう。すでに母を亡くしているギルバートが、エミーやその父親とのことがあって40歳のパティを求め、それにより spoon の世界を卒業しようとする——彼のこの無意識の願望が、しかしここで阻害されたということなのだろう。

以上が第4章までであるが、あと第1部の最後12章まで大略次のように展開する。禁足

を命じられたエミーと父親との冷戦が続き、一方 spoon に嫌悪を抱き、またパーティに軽蔑されたと感じるギルバードは突然教育委員会の呼び出しを受ける。何かよいことだろうと、うぬばれて出頭すると、エミーの父親から訴えが出ていて、私生活を査問され、彼はさっさと自分から辞表を提出する。彼は一切から手を切ってドイツへ勉強に行こうと思う。一方エミーは家出し、姉夫婦のところへ身を寄せるが、そこで病の床につく。姉夫婦はエミーに、元から彼女に好意を抱いていた銀行員の青年と撚りを戻すことを勧め、熱い手紙のやり取りがあって、やがてこの青年とエミーは結婚し、幸福な家庭を営むことになる。

5章以後では、教委に出頭したギルバートと、彼に内心好意を寄せている専横的な女性事務長とのやりとりなど光っている部分もあるが、あとはあちこちに見られるユーモアにもかかわらず後半部全体として平板で、盛り上がりにも主題性にも欠けたものとなっている。その原因としては、本来友人の女出入りを多少なりとも批判的に眺めて出発したギルバートのイメージに、いつの間にか作者自身のイメージが重なり、無責任さと感じ易さが同居するような主人公になってきたこと、もう一つは元来スプーンの青春期から成熟した人間へ脱皮していく過渡期に相当するこの段階で、ギルバート自身の自発的目覚めというより、三角関係から閉め出された拳句の行き着く先は、といった喜劇的状況で、彼について第1部が終っていることが挙げられよう。むしろ、元々 flapper の印象が強かったエミーが大人になって、ここでいくらか唐突な変身を見せるが、作者の関心は彼女のこの変化の方に示されていると見るべきだろう。次の引用は彼女の病床を見舞った Walter 青年と彼女が、病室に二人切りに残されるところである。

Now the perfect lovers were left together, and *tenderness* fairly smoked in the room. They kissed, and held each other in their arms, and felt superlative. Walter George had been wise enough to take a chair, abandoning that kneeling curtseying-knight posture. So he was at liberty to take Emmie right in his arms, without fear of the ground giving way beneath him. And he folded her to his bosom, and felt he was shielding her from the blasts of fate. *Soft, warm, tender* little bud of love, she would unfold in the greenhouse of his bosom. *Soft, warm, tender* through her thin nighty, she sent the blood to his head till he seemed to fly with her through dizzy space, to dare the terrors of the illimitable. *Warm, and tender, and yielding*, she made him so wildly sure of his desire for her that his manliness was now beyond question. He was a man among men henceforth, and would not be abashed before any of the old stagers. Heaven save and bless us, how badly he did but want her, and what a pleasure it was to be so sure of the fact. (p. 86) (イタリックは筆者)

Lady Chatterley's Lover (1928) の主題でありキイ・ワードであった 'tender(ness)' がここで繰り返し用いられていて、エミーはそのやさしさど暖かきで青年に、男性としての自らの欲望を確信させるのである。あとの項で再び触れるが、第1部の最重要の場面である。

§2 第2部——愛の巡礼

第2部は愛のために一切を放棄した二人の男女が、ミュンヘンからオーストリアを経てイタリア国境リバへ至る、途中アルプスを越えての愛の行脚紀行である。その行程は直線距離にして約 250 km はあろうか。

第2部冒頭ミュンヘンの朝は輝かしい。南ドイツ・ババリアのきらめく太陽は、かなたのアルプスの青白い稜線と共に、スキャンダルに追われてイギリスを出て来たギルバートに新生の喜びを与えるのである。ババリア高地の広大で魅力的な広がり、ロシアからイタリアまで果てしなく続く広がりの中で、彼は故国イギリスについて思う。

For the first time he saw England from the outside : tiny she seemed, and tight, and so partial. Such a little bit among all the vast rest. Whereas till now she had seemed all-in-all in herself. Now he knew it was not so. Her all-in-allness was a delusion of her natives. Her marvellous truths and standards and ideals were just local, not universal. They were just a piece of local pattern, in what was really a vast, complicated, far-reaching design. (p. 107)

初めて広大な外界から見た英国。ちっぽけな、せせこましい、偏見に満ちた英国。そこから今逃がれて来てみてはじめて、これまで完全だと思っていたものが単なる幻想で、普遍的どころか唯の地方的特色に過ぎないものに見えてくる。そしてその中で自身が次第に「非英化される」(unEnglished) のを感じる。けちな排他的な国籍などは自分の胸の中で見間に崩れていく。世界をその多面性に於いて愛し、ぞっとするような一体性、一様性、均質性はもう御免だと彼は思う。ヨーロッパの豊かで自在な多彩さの中で、今まですべてを一様にしか見てこなかった自分の鈍感が自分から抜け落ちていき、自分自身が豊饒になるように感じる。そしてこの多様さの中では、これまで広く信じられてきた理想や、自分を英国から放逐した世間的な倫理規範などは、結局は局地的なもの、一過的なものに過ぎなくて、決して普遍的なものではないと思われ、それが彼には何より心地よい。

1912年フリーグといわば不倫の恋に陥って国外に逃がれたときの心境だけではないのだろう。その後の例えば *The Rainbow* (1915) 出版に際しての世間の攻撃や厳しい処分、第一次大戦中スパイ扱いされた数々の不快な経験、これらのものが一緒になって、1920年に書かれた小説のこの2部冒頭で、このような対英国意識と大陸志向を生み出したのであろう。もっとも英国脱出ということ言えば、現実のロレンスがフリーグとの密かな駆け

落ちで手に手を取っての大陸行きであったのに対して、作品の主人公はスプーン騒ぎの後、その新生のために大陸へ逃がれたのであり、彼の「フリーダ」との出会いはしばらくあとになる。

友人と作者自身という二人のモデルをつなぎ合わせたために生じたこのような状況設定の異動によって、付随的にフリーダの夫に関するシチュエーションにも調整が施されることになる。ロレンスのノッテングム大学時代の旧師の妻だったフリーダは、作品ではボストンで開業している英国人医師のドイツ人妻 Johanna という設定になっている。しかしミュンヘンへ来たギルバートが、止宿している Alfred 教授の妻 Louise の従妹としての帰国中のヨハンナと出会ったあとは、その愛の巡礼の旅はほとんどロレンス・フリーダの実経験と重なるようである。教授宅での二人の出会いは奇妙なものであった。アメリカに夫と2人の子供（フリーダの場合は3人）を残してドイツに里帰りしているヨハンナという生命力あふれる、日の光を浴びてきらめく花にも似たこの女性に早速ギルバートは強く引かれる。この女は日本人の醜さに魅せられると言い、夫以外の恋人たちのことを語り、取り澄ました夫への嫌悪憎悪を話す。そしてこの初対面の夜、彼女はギルバートを誘う。

二人の関係は急速に進み、ギルバートはヨハンナの父ドイツ男爵と対面することになる。

Poor Gilbert stumbled with his French. The two men eyed one another. The Baron was rather elegant and *comme il faut*, with his hair and his moustaches on end. He was small, but carried himself as if he were big. His manners had that precise assertiveness of a German who is sure of himself and feels himself slightly superior. These manners always petrified Gilbert into rigidity. Only his eye remained clear and candid. He looked at the Baron with this curious indomitable candour, and the Baron glanced back at him rather fierily and irritably. So, like two very strange dogs, they stood in the window and eyed one another, and Gilbert stuttered hopeless French. He *sounded* a hopeless fool: he behaved like an unmitigated clown: only the insuperable candid stillness of his dark-blue eye saved him at all. But the Baron was impatient. (p. 169)

フリーダがロレンスの死後、1934年に亡夫を偲んで書きまとめた“*Not I, But the Wind...*”の中にこれと呼応するかのような次の一節がある。

He met my father only once, at our house. They looked at each other fiercely —my father, the pure aristocrat, Lawrence, the miner's son. My father, hostile, offered a cigarette to Lawrence. That night I dreamt that they had a

fight, and that Lawrence defeated my father. (Southern Illinois U. P., "*Not I, But the Wind...*", p. 8)

作品では、この誇り高いプロシア老貴族が一族の中でもとりわけ強く、二人のことを反対する。妥協案として離婚が成立するまで待てと言うが二人は聞き入れず、ルイーゼの勧めもあって Kloster Schaeftlarn へ一先ず二人は向かう。巡礼の第一歩である。ヨハンナの実家の白眼視を逃がれたギルバートだけではなく、ヨハンナ自身がここで幸福感と解放感をしみじみと味わう。

As she sat in the great, old Gasthaus, the handsome farmer men of Bavaria looking over their pot-lids at her with the half-hostile, challenging mountain stare, and as she heard the uncouth dialect, felt the subdued catholic savageness in the indomitable atmosphere about her, she spread her wings and took a new breath. She had escaped. She had escaped. From Boston and her house and servants, from her husband and his social position, from all the horror of that middle-class milieu, she had broken free, and she sat in a big, common room in a half deserted old inn at the foot of the Bavarian Alps, and breathed the ancient, half-savage tang of snow and passion in the air. The old, catholic, untamed spirit of the Tyrolese! How handsome and how fierce these men could be! She was happy. (p. 199)

偽善と体裁のボストン中産階級の世界からの離脱感が、チロールの人々の素朴な、包容的精神の中で、一層至福感に高められる。

更にそこからルイーゼの友人を頼って Ommerbach の村にあるその country flat へ移る。そこで水浴びするヨハンナは美しい。

In one deep little corner, in an arm of the stream, Gilbert and Johanna would sometimes bathe. The water was cold, but wonderful once one was in. Johanna was a better swimmer than Gilbert—he was no water fowl. But she rocked on the water like a full water lily, her white and gold breasts of a deep-bosomed woman of thirty-two swaying slightly to the stream, her white knees coming up like buds, her face flushed and laughing. (p. 211)

しかしこの楽園にもアメリカの夫から愚痴と怒りの手紙が届く。ヨハンナの母があとを追って来て、ボストンの子供のことヨハンナの将来のことと、その訴えは果てしなく続く。ヨハンナの苦悩、ギルバートの苛立ち。そして調停に入っていたルイーゼが、結局二人に

イタリア行きを勧めることになる。

徒歩のアルプス越えを目指して二人は先ず未知のオーストリアへ向かう。道すがら折り悪く降りつける山雨の中を、しかし二人はこみ上げる喜びを味わいながら進む。安宿に泊り、出費切りつめのために夕食をナップザックの弁当で済まし、時には干草小屋にもぐり込んで一夜を過ごし、かくして Bad Tollingen を経てオーストリアに入る。オーストリア人の物柔らかさ、今逃がれて来たプロシアの厳しさと違うなごみがそこにある。

Different the people seemed here—soft, vague, easy-going, not so fierce and hostile as the Bavarian highlanders. He was in Austria, in easy Austria. And the slight fear that hung over one in Germany—an instinctive uneasy resentment of all the officialdom—did not exist any more. Pleasant, easy, happy-go-lucky Austria! (p. 247)

岩山を登って行く困難な旅の中で、時には高地の恐ろしさと非人間的大きさに直面して、自己の卑小さをギルバートは痛感する。

Gilbert was really rather frightened. There was something terrific about this upper world. Things which looked small and near were rather far, and when one reached them, they were big, great masses where one expected stones, jagged valley where one saw just a hollow groove. He had climbed alone rather high—and he suddenly realised how tiny he was—no bigger than a fly. (p. 263)

二人は巡礼の道すがら、時に峠の小屋然たる礼拝堂や、路傍のさまざまなキリスト像やマリア像を見る。

They went into a shrine. It was all hung with *ex voto* arms and legs and bits of people, in wax. And in the back sat a ghastly life-size Christ, streaked livid with blood, and with an awful, dying, almost murderous-looking face. He was so powerful too—and like a man in the flush of life who realises he has just been murdered.

“There’s Inry selling joints,” said Stanley sardonically. But Gillbert was startled, shocked, and he could not forget. Why? Why this awful thing in a fine, big new shrine? Why this. (p. 268)

この引用中の Stanley とは二人の旅に途中合流した二青年の内の一人である。この恐ろしいキリスト像から大きい衝撃を受けたのはギルバートだけではない。この衝撃はロレンス自身の体験として、紀行文 *Twilight in Italy* (1916) の中でも詳しく触れられる。

In a valley near St. Jakob, just over the ridge, a long way from the railway, there is a very big, important shrine by the roadside. It is a chapel built in the baroque manner, florid pink and cream outside, with opulent small arches. And inside is the most startlingly sensational Christus I have ever seen. He is a big, powerful man, seated after the crucifixion, perhaps after the resurrection, sitting by the grave. He sits sideways, as if the extremity were over, finished, the agitation done with, only the result of the experience remaining. There is some blood on his powerful, naked, defeated body, that sits rather hulked. But it is the face which is so terrifying. It is slightly turned over the hulked, crucified shoulder, to look. And the look of this face, of which the body has been killed, is beyond all expectation horrible. The eyes look at one, yet have no seeing in them, they seem to see only their own blood. For they are bloodshot till the whites are scarlet, the iris is purpled. These red, bloody eyes with their stained pupils, glancing awfully at all who enter the shrine, looking as if to see through the blood of the late brutal death, are terrible. The naked, strong body has known death, and sits in utter dejection, finished, hulked, a weight of shame. And what remains of life is in the face, whose expression is sinister and gruesome, like that of an unrelenting criminal violated by torture. The criminal look of misery and hatred on the fixed, violated face and in the bloodshot eyes is almost impossible. He is conquered, beaten, broken, his body is a mass of torture, an unthinkable shame. Yet his will remains obstinate and ugly, integral with utter hatred.

It is a great shock to find this figure sitting in a handsome, baroque, pink-washed shrine in one of those Alpine valleys which to our thinking are all flowers and romance, like the picture in the Tate Gallery. 'Spring in the Austrian Tyrol' is to our minds a vision of pristine loveliness. It contains also this Christ of the heavy body defiled by torture and death, the strong, virile life overcome by physical violence, the eyes still looking back bloodshot in consummate hate and misery.

The shrine was well kept and evidently much used. It was hung with ex-voto limbs and with many gifts. It was a centre of worship, of a sort of almost obscene worship. Afterwards the black pine trees and the river of that valley seemed unclean, as if an unclean spirit lived there. The very flowers seemed unnatural, and the white gleam on the mountain-tops was a glisten of supreme,

cynical horror. (The Phoenix Ed, *Twilight in Italy*, pp. 12—3)

ロレンスのこの愛の道行が同時にキリスト像をめぐる歩く巡礼であったことが、キリストの復活と一体的接触の愛を主題としたロレンス最後の傑作中篇 *The Man Who Died* を後年書く契機になったのであろう。

Gemserjoch を越えるとき、切り立つ断崖を斜めに這い進む小道をよじ登ると、そこがその頂上であった。

But he wanted only one thing—to come to the further, southern brink of the summit, and look across, across clear space, at that marvellous god-proud aloof pyramid of a peak, flashing its snow-stripes like some snow-beast, and bluing the clear air beyond.

They came to the rounded curve of the down-slope. Beyond, mountain tops. They went on, till they could see beneath the whole slope—where vegetation began, and shrubs, and trees, and the dense greenery.—It was a deep valley, narrow, and full of trees and verdure, far away below sinking to a still visible high-road. And it was so sunny, so sunny and warm. (p. 266)

南へあこがれ、太陽と豊饒のイタリアへの憧憬を終生もち続けたロレンスの心情が、眼下に広がる南面の全斜面を俯瞰するギルバートの感激の中に、いかにも生き生きと力強く出ているのではないか。

Sterzing から Bozen, 更に Trento へと旅は続く。未だオーストリア領である筈なのにすでにブドウの世界、いよいよイタリアへの接近にギルバートとヨハンナの心がはずむ。しかしよいことばかりだったわけではない。“*Not I, But the Wind...*”の中でこの辺りのことをフリーダは次のように書く。

How I want to recapture the gaiety of that adventurous walk into Italy, romantic Italy, with all its glamour and sunshine.

We arrived at Trento, but alas for the glamour! We could only afford a very cheap hotel and the marks on the walls, the doubtful sheets, and worst of all the W. C.'s were too much for me.

The people were strangers, I could not speak Italian, then.

So, one morning, much to Lawrence's dismay, he found me sitting on a bench under the statue of Dante, weeping bitterly. He had seen me walk barefoot over icy stubble, laughing at wet and hunger and cold; it had all seemed only fun to me, and here I was crying because of the city-uncleanness and the W.C.'s. It

had taken us about six weeks to get there. (Southern Illinois U. P., "*Not I, But the Wind...*", p. 54)

フリーダの筆にはユーモアがあり、ロレンスへのいたわり、心づかいがあるのだが、*Mr Noon*の作者はもっとリアリステックで自己告白的である。部屋探しに出かける二人、しかしギルバートは相変らず気難しい我まをむき出しに、その仕事をヨハンナに押しつける。

Gilbert, as usual, flatly refused to commit himself to the act of asking. Johanna took her courage, and knocked at one of the old doors: and knocked again. From the inner darkness appeared a yellow, evil old crone.

"Er—er—camera—affitare—affitarsi—" stammered poor Johanna.

The old crone mumbled something vindictive and completely unintelligible, and shut the door in Johanna's face with a clap. Our pair of finches slunk down that vile stair. They had not imagined they could feel so diminished. Still they persisted for some time in the jumbled, gutter-like streets. And then they descended into the more wholesome town, into the open.

They sat in the Piazza di Dante and surveyed the new statue of that uncongenial poet, and the trees and plots of grass. And Johanna in her old panama that was hopelessly and forever streaked with dye that had run out of the cherry ribbon; in a burberry that sagged at the sides like a tramp-woman's; and in a weary battered frock of dark cotton voile; poor Johanna sat on a seat in the Piazza di Dante, in that ghastly town of Trento, and sobbed bitterly. (pp. 284—5)

そしてここで惨めさに打ちひしがれた二人の目に写った観光ポスターから、ガルダ湖畔、国境の町リバへと二人は向かうことになる。そこは何もかもが豊かで、熱帯的で、日の光がすべてのものに織り込まれているように感じられる。

It all seemed so luxuriant, almost tropical—and all so sun-tissued. The leaves, the earth, the plant-stems, all seemed rather like heat-fabrications: whereas in England and Germany all nature is built of water, transfigured water. But no—here already Gilbert saw, as by an inspiration, the magic of tigerish heat-substance, sharp leaves and blades built of heat, and black, black, impenetrably dark grapes, and pale grapes like drops of slow, stealthy light dripping. He loved it, and they were both inordinately happy. He imagined rice-fields on a flat piece of plain. (p. 286)

水の国であるイギリス、ドイツと正反対の、光したたる豊饒の国が今二人の眼前に現出する。

Gilbert and Johanna would buy lunch, and go into the old grove of olives above the shore, and there they would boil their eggs and make their tea and eat their fruit, and sit in the hot September afternoon watching the lake glitter, and feeling the mellowness of the world, the rich, ripe beauty of this Italian, sub-Alpine world, its remoteness and its big indifference. Why have problems! (p. 289)

イギリスからもプロシアからも遠く離れた、すべてのわずらわしきから解放された世界への到着。作品がここで中断されたことは偶然ではない。二人の愛の巡礼は遂に行き着くべき世界へ到達したのだから。

§3 第2部——愛と友愛

石もて母国を追われて来た男と、その男との愛を全うするために夫も子供も故郷も捨て去った女の恋の道行たる「愛の巡礼」は、また同時に二人の互に「愛の完成」を求める試練の旅でもあった。相争い、そしてまた融和して、二人の愛の在り方を究明する愛の巡礼であったのである。

ヨハンナは奔放自在の女である。常に複数の恋人や愛人を持ち、彼らの存在を否定せぬのは夫の存在を否定せぬのと同じだと言う。オリエント急行の食堂車のテーブルの下で膝に手を掛けてきたり、両脚で膝をはさんできたりする厚かましい日本人乗客と話し込んでいて乗り越し、その夜ギルバートを誘う。一方ギルバートは彼女の‘universal’な愛、‘general love’を認めない。第2部の彼は純真であり純粹であり、自分は‘particular love’を信じると言う。ヨハンナは、それは一人の人間を独占しようとする恐ろしい所業で、すべて jealousy に根ざしていると鋭く反論する。嫉妬心は卑しいぞっとするもので、結婚というしきたりは独占的な下劣なものと言う。このようなヨハンナにギルバートは、physically に、同時に二か所に存在出来ぬように、physically に、二人の人間を同時に愛することは出来ぬ、physical love は排他的なものであり、博愛的愛は spiritual love に過ぎず、精神愛など自分は真平だと主張する (pp. 164—6)。これは二人が出会った早い段階での議論であるが、後にアルプス越えのとき、途中で加わったスタンレー青年に彼女はこの「博愛」を実践し、ギルバートだけではなく読者も驚かせる。やみくもに人妻を愛したギルバートは一方その愛に純粹であるが、ヨハンナは何をもかえりみずその愛を受け入れながら、同時に複数の男性を愛することが出来る。世間的な倫理道德を越えるという点で共通するものを持ちながら、或る意味では極めて対照的な違いを示す二人の男女の愛への考え方なので

ある。

このような愛に「友愛」がからまってくる時、読者は奇怪な感じをもつことを免れない。すでに例えば *Women in love* (1920) 20章では、'Jiu-jitsu'による男同士の肉体の触れ合いを通して通い合う友愛のことが述べられていたが、本作でも同様な場面や主張が出て来るのである。若いオーストリア軍の兵士達を見る内、女から離れて男達と共に死の危険に身をさらしたいという深い願望がギルバートに湧き上がる。

Gilbert watched the last horse-flanks disappear round the corner of the white, low-roofed farm—and then he stared in silence across the shallow, sun-shimmering valley. And stared with regret—a deep regret. He forgot the woman at his side—and love, and happiness. And his heart burned to be with the men, the strange, dark, heavy soldiery, so young and strong with life, reckless and sensual. He wanted it—he wanted it—and not only life with a woman. The thrill of soldiery went heavily through his blood: the glamour of the dark, positive fighting spirit. (p. 209)

またライ麦畑の穫り入れをバルコニーの上から眺めるギルバートは、畑の男達と一体化したいと願う。

Gilbert would stand a long time on his high balcony, watching them work in the misty morning, watching them come in at noon-day, when the farm-bell rang, watching the dusk gather over them. And always, he wished he were one with them—even with the laborers who worked and whetted their scythes and sat down to rest under the shade of the standing corn. To be at one with men in a physical activity. Why could he not? He had only his life with Johanna, and the bit of work he was doing. (p. 227)

この場面はヨハンナとの 'the perfect, consummating sleep of true, terrible marriage' (p. 226) に至る激しい love-passion の営みの描写の直後に出て来る。これらの外にも、筏を操る精悍な山男達を見てギルバートが、女から離れた男だけの生活、力を合わせる男達の単純な生き方に、郷愁を感じる場面がある (p. 210)。

男女の完全な合一の道を探ったロレンスが、一体何故に、それと並置するかの如く、兵士や農夫や木こり達との一体化の願望をギルバートに抱かせるのか。それはホモセクシュアルとか言うより、男同士の仕事の希求ということなのであろう。男同士の仕事によって人類と結びつくことが出来るのに、今自分にあるものはヨハンナとの生活と、音楽という孤立した私的な仕事だけであることを、ギルバートは引け目とためらいをもって感じてい

る。ロレンスの「仕事」へのこだわりは 1914 年頃に書かれた *Study of Thomas Hardy* のような評論の中にも見られるが、しかしこの小説では何か無理に押し込められた夾雑物のような感じは免れない。永遠の男の友情をもって協力参加する共通の活動の場への願望と、男の生活のそのような半分を断ち切られていることへの嘆きを、この男女の愛の物語の中に断片的に挿入されるとき、読者は作者の真意をどうも計り兼ねる。しかし当然のことながらロレンスは気まぐれにこのようなことを書いたのではあるまい。例えばその背景には、時代の趨勢、時代の思想風潮ということがあっただろう。即ち最も個性的で個人主義的な作家であっても、集団によって歴史が作られていく 20 世紀の潮流の真只中に入っただけでは、人間の連帯ということも意識せざるを得なかったのではないかということである。あるいはまた、性愛の文学の旗手としての自信と信念はあっても、何かそれだけではというような気持のためたいが時に起ることもあっただろう。それに協力や連帯ということは別にしても、ロレンス自身が理知的なピューリタンの母親に育てられて、生来勤勉な、仕事を重んじそれにあこがれる性向をもっていたということでもあるのだろう。

ともあれ男女の性愛の物語に男同士の友愛、仕事の連帯が顔を出す。ロレンス最後の長篇 *Chatterley* で愛のテーマは一切のこだわりや迷いを越えて純粹な形に一本化されるが、そこへ至る過程だとして彼の全文学を考えれば、実はこの「男の友情—活動参加」は次に続く 20 年代前半のいわゆる彼の leadership 小説につながるもので、従ってそれは、いわばロレンスの作品系列のバイパスへの導入路となるものであったと考えるべきであろう（これについては項を改めてもう一度触れる）。とにかくこのように作品のメイン・テーマと整合しにくい主張が幾度か繰り返されて、二人の男女の愛の巡礼、愛の探求という *Chatterley*に通じる主題との関連に不審を抱かせる。同じ時期に書かれた *Aaron's Rod* が同じような混濁を示しそうになりながら、友愛原理から更に一步進んだ指導者原理で統括されていて、リーダーシップ小説群の最初のものとなり、そのような原理の適否、賛否は別として、一つのまとまった世界を提供しているのと対照的である。

§ 4 第 2 部——愛の創造

ヨハンナがアメリカにいる夫 Everard のもとへ戻ることの出来ない理由は、ボストンの取り澄ました知的中産階級の偽善への憎悪であったが、とりわけ性を淫靡なものとして、恥ずべきものとして、ひたすら秘匿しようとする夫の態度が我慢ならぬのであった。

Everard's nature was basically sensual. But this he *hid*—though mind you, he was *au fond* proud of it. Secretly, almost diabolically he flattered himself on his dark, sensual prowess: and not without reason. But he had to keep it lurking in secret. Openly: ah, openly, he was all for the non-existence of such

things. (p. 191)

彼は官能を秘匿し、性的満足を罪悪視し、妻を自分の 'white snowflower' に、'eternal white virgin' に仕立て、聖女の梓に押し込めようとする。彼の性的偽善の極め付けがトイレのエピソードであった。エベラードにとり、便所は「存在してはならぬ」名無しの場所であり、そこで二人が鉢合わせすると大変なことになる。万事あけっ広げなヨハンナは、中へ飛び込もうとして閉じたドアの取っ手をつかみ、揺すぶり動かし兼ねないからである。

There would Johanna seize this nameless door-handle and twist and pull, till from within came the snarl of a wounded and enraged tiger.

"Oh, are *you* there!" she would exclaim, and stand aside.

And presently would emerge Everard, handsome and white with rage, trembling with fury.

"Are you mad, woman!" he would snarl as he passed her. (p. 192)

このような夫に対して彼女は我慢ならない。彼女が多くの恋人をもち、それを少しもはばからない原因の一つは、このような夫への反動であり、それが生来の天衣無縫の性格、大胆不敵の言動を増幅しているのであろう。そしてその言動はヨハンナの主張というより、作者自身の主張である。人は官能を恥じてはならぬ、人にはおのが暗き燃え立つ官能の成就への生得権があり、おのが名誉にかけてもそれを成就させねばならぬと読者に語りかける (p. 193)。

このような性愛の全面的肯定の根拠を、ロレンスは一体何処に置いていたのであろうか。

Let us confess our belief: our deep, our religious belief. The great eternity of creation does not lie in the spirit, in the ideal. It lies in the everlasting and incalculable throb of passion and desire. The ideal is but the iridescence of the strange flux. Life does not begin in the mind: or in some ideal spirit. Life begins in the deep, the indescribable sensual throb of desire, pre-mental. (p. 189)

情熱と欲望の果てしなく限らない鼓動から生まれる永遠の創造——性愛をこのような創造的行為と見なすとき、その位置付けは見事に確定するのである。そしてこの創造的行為たる性愛は、決して頭や心や思案によって行なわれるものではないと付け加えることを作者は忘れない。

You can no more bring about, deliberately, a splendid passion sexual storm between yourself and your woman than you can bring about a thunderstorm in the air. All the little tricks, all the intensifications of will remain no more than

tricks and will-pressure. You have got to release from mental control the deep springs of passion: and after that there has got to be the leap to polarised adjustment with the woman. And these two things are deep mysteries. (p. 190)

情熱の深い泉を知的抑制から解放する必要を強調し、男女の純粋な結びつきへの思い切った飛躍の必要を訴えるのである。そして結婚生活の慣れ (accustomedness) の中にそれらが得られることを言い、その意味で結婚の神聖を主張する。そしてこの結婚の奥儀を極めることで、つまり結婚生活での努力において、英国人はフランス人やドイツ人にこれまで勝ってきた、英国人の偉大さの秘密がここにあったと、本気とユーモアの境目でロレンスは力説するのである (pp. 190—1)。ところで作者はここでも、人物の行動や発言だけでなく、作者の読者への語りかけという本作品の特異な方法によって、まるで小説ではないかのように、自己の所説を説いている。永遠の創造としての性愛の全面的な肯定、それがための努力の過程としての結婚生活の神聖性の主張、ロレンスは彼の性哲学をこの語りかけの方法によって明快に展開しているのである。

§ 5 第 2 部——愛の戦い

第 17 章でギルバートは、ヨハンナの実家の白眼視に耐え兼ねて Trier の町のホテルに止宿するが、翌朝、町の露店市へ来てすずらんの花を見、そのあと思いにふける。——戦いでない愛など何になろう。一つの茶碗の中に入れられた二さじの蜂蜜のように、女と混じり合うのは御免だと彼は思うのである。これはどういうことであろうか。ヨハンナと相愛の仲でありながら、彼は彼女と混じり合い (mingling)、同化することを恐れていて、愛は戦いで、情熱も欲望も闘争であると、しきりに対立化しようとする。地中深いところからまり合うすずらんの花の根のように、魂の地下の根深いところでの戦い、暗黒の中での愛の格闘、いつまでも止むことのない闘争が、愛の本質であるとする (pp. 173—4)。この考えは第 19 章でも繰り返されて、ここでは愛の戦いは更に男女の戦いに具体化され、作者はその際、男が真に男であり、女が真に女である限り、二人は幸福になれるとする。本来男には男の、女には女の、相互に代り得ぬ特性があり、この両極対立が生の神秘の根元になっているとも言ふ。そしてこの不可侵・自立自存であるべき両極対立が、互に拡大意志、征服意志をもつとき、綱の引き合い、戦いが起きるが、本来相手の極に相手を停めさせ、相手の領分を侵さぬ鉄則を守るならば、それによって丁度水と火の、内部では結ばれている対立のように、そこに均衡が保たれ、逆に言えばその均衡が失われたとき、それを取り戻すための男女の戦いが生じるのだと言う (pp. 211—2)。

二者対立はロレンスの好む図式で、彼の重要な論文 *The Crown* (1915) などはこの図式に直接基づいたものであるが、ギルバートとヨハンナの激しい衝突、根本的にはロレンス

自身とフリーダの日常の愛に於ける厳しい戦いが、このような男女両極の対立としての愛の考えの根底にあるのだろう。そして重要なことはロレンスが発展的なものとしてこの対立を肯定承認しているということである。対立を止揚のための過程として積極的に認めるという弁証法的な姿勢によって、自らの日常を熟視しなければならなかったロレンスの姿がそこに浮かび上がってくるのである。

それではこの二人の主人公の両極対立に真の止揚がなされたのであろうか。対立の上に釣り合う「王冠」を、あるいは隔たりをつなぐ「虹」を、ロレンスはこの作品の中で見出したであろうか。本作で彼は、互に屈することのない対立者の「結合」(union) からこそ、あらゆる生命と輝きが生まれると言う。丁度太陽と雨、純粹の光と純粹の水の完全なるまぐわい (perfect consummating) から輝かしい虹が生まれるように。火と水のような二人の険しい対立者の瞬間の交わり (moment's matching)こそが、愛の対立の窮極の王冠だとロレンスは考えるのである。

The love of two splendid opposites. My dear—I mean you, gentle reader—all life and splendour is made up out of the union of indomitable opposites. We live, all of us balanced delicately on the rainbow, which is born of pure light and pure water. Think, gentle reader: out of the perfect consummating of sun and rain leaps the all-promising rainbow: leap also the yellow-and-white daisies, pink-and-gold roses, good green cabbages, caterpillars, serpents and all the rest. Out of what, gentle reader? The moment's matching of the two terrible opposites, fire and water. The two eternal, universal enemies, you call them? I call them the man and the woman of the material universe, father and mother of all things. If you don't believe me, that's your affair. (p. 186)

しかしそれは決して二人の狎れ合いのしどけない混じり合いではなかった。あくまでも相対立するものとしての性なのであり、つがい (mating) は常に半ば戦いで、結婚の床は燃え上がる戦場だとする。そしてこのような戦いが止揚されて得られる真の和合こそ、前項で見てきた如く、一つの創造的行爲なのであり、これによって新しい生き物に生まれ変わることが出来るのだと言う。

Ah God, the terrible agony and bliss of sheer passion, sheer, surpassing desire. The agony and bliss of such an embrace, the very brink of death, and yet the sheer overwhelming wave of life itself. Ach, how awful and utterly unexpected it is, before it happens: like drowning, or like birth. How fearful, how causeless, how forever voiceless.

Gilbert afterwards lay shattered, his old soul, his old mind and psyche shattered and gone. And he lay prostrate, a new thing, a new creature: a prostrate, naked, new thing.

And he and Johanna slept, with his arm round her, and her breast, one breast, in his hand: the perfect, consummating sleep of true, terrible marriage. As a new-born child sleeps at the breast, so the newly-naked, shattered, new-born couple sleep together upon the heaving wave of the invisible creative life, side by side, two together, enveloped in fruition. (pp. 225—6)

ロレンスは現代の結婚が単なる精神的結合に墮していることを批判し、結婚とは根元の震え、対立から生まれた血みどろの新生であって、男は更に男らしく生まれ変わり、女は更に女性らしく生まれ変わり、この生涯の再生の純粹な創造的行為は終りなく続くべきことを言う。「果てて生まれる (shattered and born) 終りなき創造 (unceasing creation)」とロレンスは呼ぶのである (pp. 226—7)。そして今やギルバートを年上のヨハンナに結びつけるのは決して母性的愛情ではなく、耐え難い程の官能の喜び (intolerable sensual sweetness) であり (p. 290)、それは千人のエミー (a thousand Emmies) と未熟なスプーンを交換しても、とても達し得ない境位のものであった (p. 291)。

§ むすびに

第 19 章で、ヨハンナの実家との関係やボストンの夫との問題のために、二人の行く手は険しくなる。そのような中でギルバートの胸に意志の緊張が加わり、為に彼の love-making はその夜 'gripped and intense and almost cruel' なものになる (p. 231)。2 日後の夜ギルバートがふと目を覚ますとヨハンナが窓辺ですすり泣いていて、わけをただとようやく、彼は残酷で自分に苦痛を与えていると言う。彼女の冷え切った体を彼は自分の腕で、全身で包み込み、懸命に暖めようとする。初めはギルバートを、愛していないのだとなじっていたヨハンナも、彼の腕の中で次第に強く寄り添い、二人は次第に暖まってくる。このようにして再び二人は幸福を感じ、回復を遂げる (pp. 231—3)。本作にこのような場面があることは注目すべきことと思われる。*Lady Chatterley's Lover* (1928) を一貫して支配していた 'Tenderness' の哲学に通じるものを、この場面から感知することは容易であるからである。

Chatterley は対立する二つの性が遂に至る Tenderness の境位をひたすら追求した作品であった。相寄る二つの魂がそれぞれの自我や自意識を振り捨てて結ばれるとき、階級の違いや金銭の出所につながるこだわりが霧消し、君臨するものとしてでなく両性の共有するものとして phallus が意識されて、kindness そして tenderness の自在な発動がおこなわ

れることを、*Chatterley* でロレンスは必死に説いた。そしてこれは単に性愛の理想の境地を示すだけのものではなかった。‘tenderness’は実にロレンスの世界の窮極の境地、生涯の結論であった。何故なら彼にとり、それは対立を越えた絶対信頼に基づく絶対平和の世界であり、自我に疲れて孤独にさいなまれる人類にとっての唯一欣求の彼岸であったからである。

Chatterley の三つの版が書かれたのが1926年から28年、*Mr Noon* の執筆はそれに5年以上先立っている。そこでは未だそれぞれの自我を振りかざした両性が必死にせめぎ合い、しかしそこから何とか輝く創造的な性愛を止揚せんとしていた。だが対立する二つの性が互の自我や自意識を捨て去って、こだわりなく結び合う真の tenderness の境位に達するには、更に時間を要した。しかし本小論の§1の項末尾ですでに触れたように、第1部最後の変身したエミーのウォルター青年との病床場面に於いて、‘soft’, ‘warm’, ‘tender(ness)’が幾度も繰り返されていた。そして今度は第2部19章、本項冒頭の、傷つき苦しみ一人おえつしているヨハンナを必死に暖めようと、ギルバートが我が身の中に包み込む場面である。この場面も *Chatterley* における ‘tenderness’ と決して遠くないものであろう。何故ならここで僅か一頁足らずの中に ‘warm’ が10回繰り返されるが、エミー変身の場面だけでなく *Chatterley* に於いても、‘warm’, ‘warm-hearted’ は ‘tender’ と全く同義語であった。

... I do believe in something. I believe in being warm-hearted. I believe especially in being warm-hearted in love, in fucking with a warm heart. I believe if men could fuck with warm hearts, and the women take it warm-heartedly, everything would come all right. (*Chatterley*, Penguin Books, p. 215)

冷えた体が求める暖かさは同時に心の暖かさであることは言うまでもないが、*Mr Noon* ではこれが単に一つのエピソードに終わっているに過ぎない。しかしそれが *Chatterley* の tenderness の曙光であったと見ることは決して困難ではない。

しかし *Mr Noon* での曙光が *Chatterley* に向かって次第に明るさを増していったわけではない。その間5年余りの間にロレンスの文学はバイパスに入っていた。*Mr Noon* と並行して執筆されていた *Aaron's Rod* (1922) は先に触れたように、友情・友愛の原理から一歩進んで指導者原理に入っていた。そこでは愛の構造から力の構造への移行、より偉大な魂への深い臣従の道が暗示されていた。そしてこの指導者原理は *Kangaroo* (1923) に於いて政治的に更に展開され、次いで *The Plumed Serpent* (1926) に於いて宗教的に更に強調される。この leadership 三部作を重視する考え方もあろうが、本小論はこれをロレンス文学の大きな流れに於ける一つのバイパスであったと見たい。ロレンス自身が1928年3月13日の書簡で、*The Plumed Serpent* への批判に対する返事として、次のように書いている。

On the whole, I think you're right. The hero is obsolete, and the leader of men is a back number. After all, at the back of the hero is the militant ideal: and the militant ideal, or the ideal militant seems to me also a cold egg. We're sort of sick of all forms of militarism and militantism, and *Miles* is a name no more, for a man. On the whole I agree with you, the leader-cum-follower relationship is a bore. And the new relationship will be some sort of tenderness, sensitive, between men and men and men and women, and not the one up one down, lead on I follow, *ich dien* sort of business. (Heinemann, *The Letters of D. H. L.* ed. by A. Huxley, p. 711)

leadership は時代遅れで軍国主義的で、真に樹立さるべき新しい人間関係は tenderness だとロレンス自身が言っているのである。*Mr Noon* はロレンスがずっと引きずって来た友愛原理を、すでに見てきたように、含んではいるものの、指導者原理までには踏み込むことがなかった。つまり *Mr Noon* は、バイパスの分岐点にありながらロレンス文学のメイン・ストリートに踏み止どまって、その先のやがて到達する終着点、ロレンス文学の総決算たる *Chatterley* の 'tenderness' に最も近くつながる作品であったと言うことが出来よう。

Mr Noon が未完で終わった理由についてケンブリッジ版の Introduction は幾つものことを推測している (xxxiii—xxxiv)。結局 1922 年～26 年の間では、leadership の作品を発表しながらの、この愛の小説の完結、発表は難しかったのであろうし、26 年 *Chatterley* の執筆開始後、28 年の発表、30 年の死までは、この生涯の決定的作品と並行して世に問うことは、同系統の作品であるが故に、一層出来ないことであったのだろうと思われる。また一方第 2 部だけを考えてみても、これは物議をかもしたフリーダとの恋愛事件前後がほとんど直接的に描かれる、極めてモデル性の強いものであり、しかもロレンス・サイドから一方的に描かれているものである。これが完成発表された場合、フリーダの先夫と子供たちや彼女の実家が受ける被害は、世間周知の事件であっただけに、計り知れないものであったらうと思われ、ロレンスの強烈な信念をしても、さすがにはばかられたということもあるのだろう。

先にも触れたように、本作は 1 部 2 部を通じて作者が読者に 'gentle reader' としばしば話しかける、現代小説には珍しい語り口の作品である。それはしばしばユーモラスであり、おどけ調であり、その様な調子は、全体として軽い感じの第 1 部だけでなく、第 2 部でもよく顔を出す。そしてこのような語りかけの部分で、却って作者は思い切り自分の考え、主張を述べる事が出来た。ロレンスのような作家には、それは好都合な方法であったと言えるのかもしれない。('85. 10. 24)